

安全と安心

松浦祥次郎

(財)原子力安全研究協会 顧問
前原子力安全委員会委員長

第2回東海フォーラム
平成19年2月26日

今日、お話ししたいこと

「安全」と「安心」とは、深い関係にあるが別ごとであること。

「安全」と説明されても「安心」出来ないことがある。

「安心」していても、安全でないことも多い。

「安全」は経験と、知恵と、技術と、心掛けと、それらを活かすお金で作り出す。

「安心」は信じる事から湧いてくる気持ち。他人にはどうしようもないこと。

「安全」と「安心」はどのようにつながるのでしょうか。

安全、安心に共通の「安」は、もともとはどんな意味なのでしょう。



中国の古代文字(金文)にそのはじめの形があります。「字統」(白川静著、平凡社)では、

「新しく嫁してきた婦を、その家廟に入れて廟見の礼を行い、祖霊にその安寧を求める儀礼が、安の原義であろう」と書かれています。

「結婚した女性が、障りなく一生を過ごせるように」との祈りをあらわす字なのです。

安全確保に携わる者が、心底に据えておくべきことです。この祈りを心の底に据えるのが「安全文化」の元(もと、はじめ)であります。

「安全」は物ではありません。

「安全」は、障害を受けないこと、受ける可能性が十分に低い状況・環境です。

このことは、どの言語の辞書の説明でも全く同じです。

安全の度合いは、経験と知識に基づいて、科学的、技術的に相当合理的に確かめられます。

(適切に定められた方法と条件に従って確かめれば、誰がやっても同じ結果になります)

安全は、必要に応じて設定した目標を、必要な資源(人、金、物)を使うことで達成できます。(勿論、真面目に使うことで)

重要な課題は、どのように安全の目標を設定するかです。

そして、「安全確保」とはこの目標に則って、障り少なく人々が生活できる状況・環境を造り、守ることで。

「安心」は、物でもなければ、状況や環境でもありません。

「安心」は、ある状況、環境の中で人が感性によって抱く気持ち、感情です。

同じ状況、環境におかれても、人によって異なるのが普通です。

安心していても、決して安全ではなく、不安心でも十分安全なことはよくあります。

私の経験：岩登りをしているときの自信に満ちた安心感と、ベテランドライバーが運転しているが、崖淵を疾駆するバスに乗っているときの不安感。

子供の頃読んで納得しながら、不思議に
思った話(ものは考えよう):

AさんがB船長に質問:あなたのお祖父さん
も、お父さんも海でお亡くなりになったそう
ですが、それでもあなたは船や海が怖しく
はないのですか？

B船長の反問:あなたのお祖父さんも、お父
さんも畳の上で亡くなられたと思いますが、
よくもあなたは畳が怖ろしくありませんね？

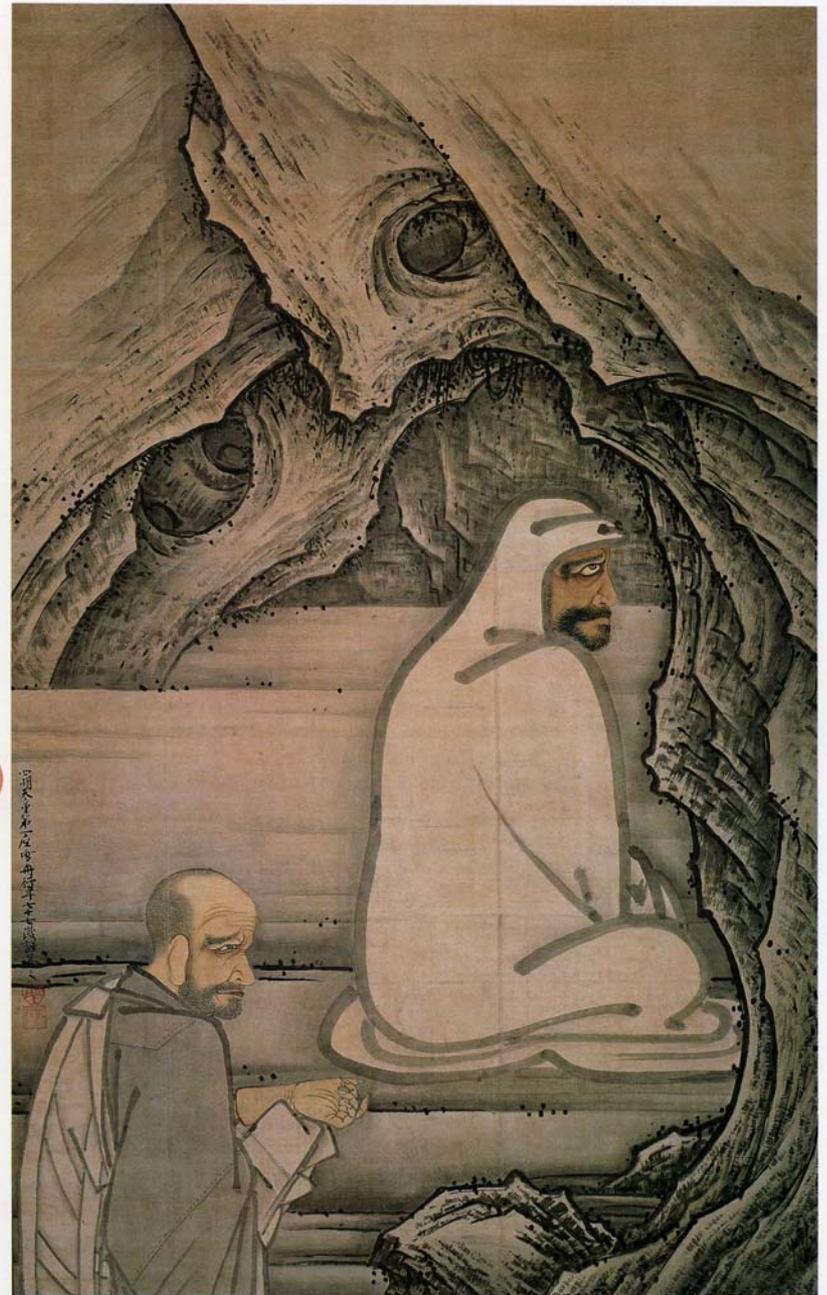
「安心」は元来仏教の思想。

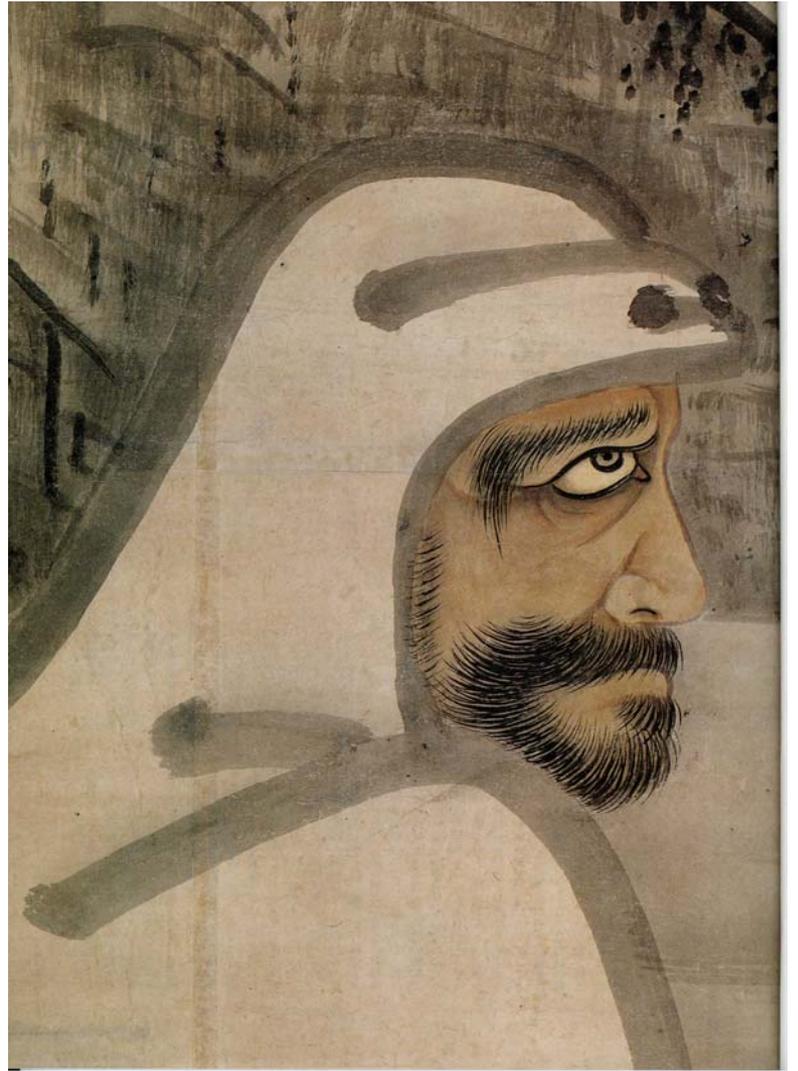
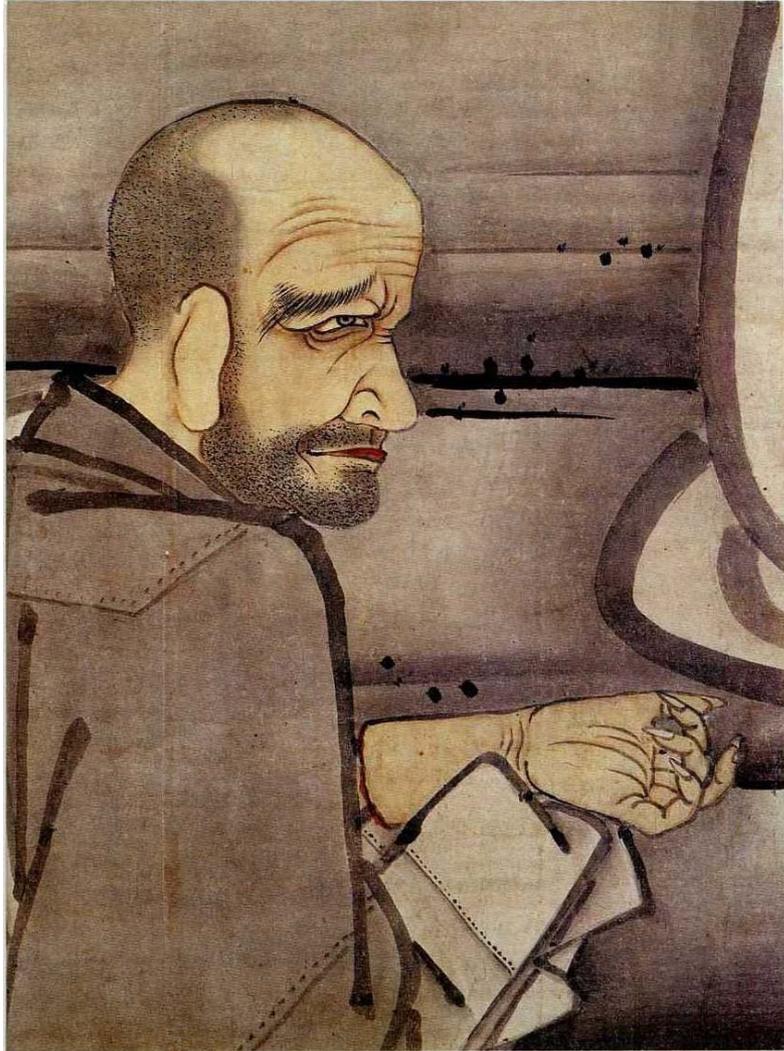
「大安心」に至るのが仏教の
目標。

「紙本墨画淡彩慧可断臂図」
(雪舟画、国宝)(1496年)
183.8x112.8cmの話。



雪舟禅師の断臂図 明応5年(1496) 紙本墨画淡彩
183.8x112.8cm 高年寺*
九正の筆跡のせいで、補光(のちの補色)といふ感じがやがて出て……左前は部分





安心は心が平安な状態のことであり、人生で最も大切な、望ましいことでもあります。

しかし、個々の心の状態であり、他人にはどうすることもできないし、

無理に他人に安心を押し付けるのは、もっての外のことです。

ところが、社会的な多くの事業は、人々の安心感を得ないと受け入れられません。

では「安全」と「安心」とは、どのようにつながるのでしょうか。

安心と安全をつなぐ橋は「信頼」だと考えます。

信頼は、長期の安全実績と、安全確保に携わる人の仕事のありようが評価される時に得られるでしょう。

安全の実績、実態を公正に、透明に示すこと。
そのための客観的な証拠をとり備えておくこと。
可否判断の拠り所(判断基準)をはっきりしておくこと。
このような努力を続けることで、安全—信頼の鎖が
繋がることでしょう。

個人が安心を得る知恵は、安全の度合いを確かめる
習慣を身につけることだと思います。

安心は何処までも、個人の心に生じることです。

他の誰も其処に踏み込むことは出来ないし、控える
べきでしょう。

一方で、絶対的な安全を実現することは、人間には
不可能なことです。